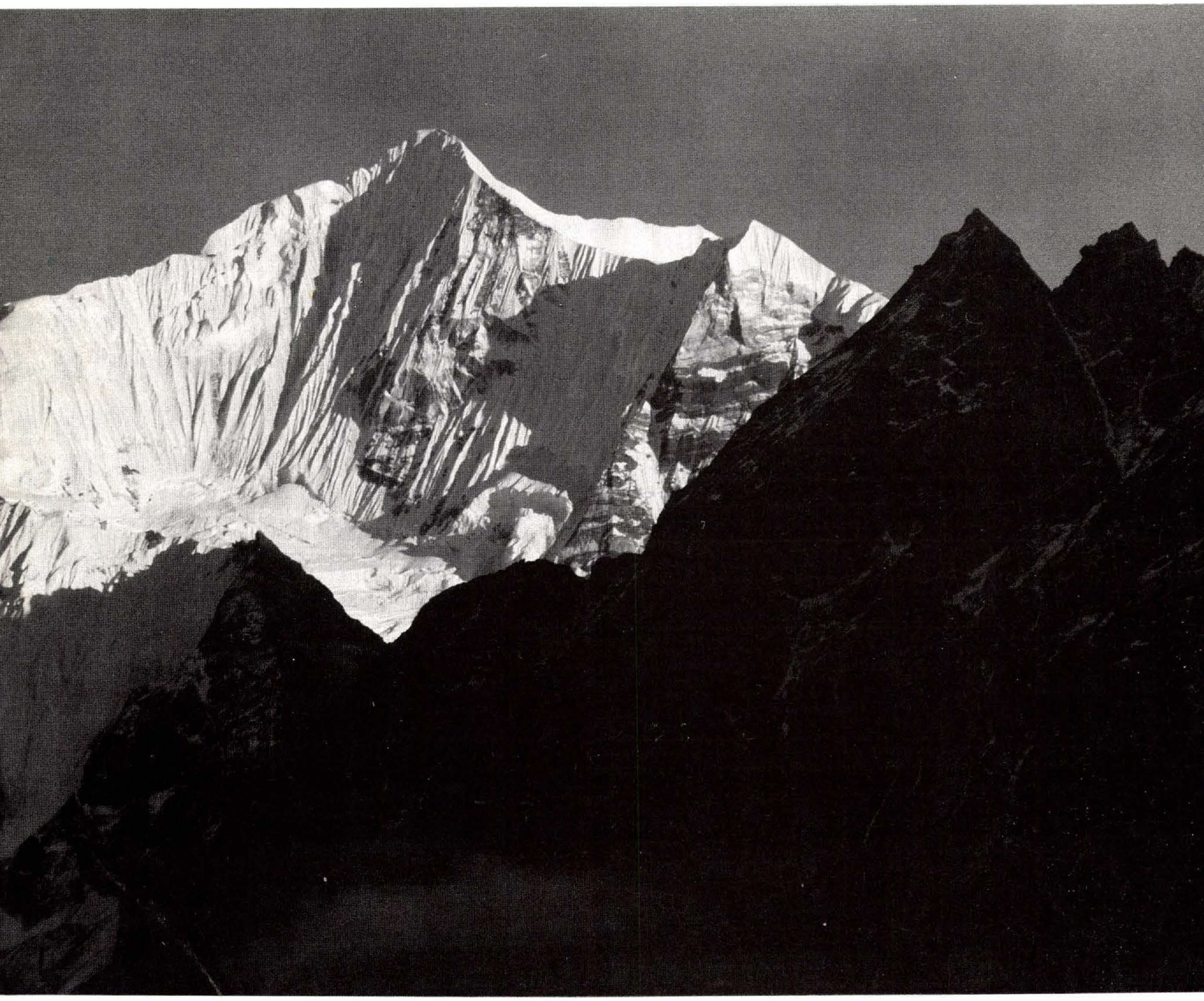
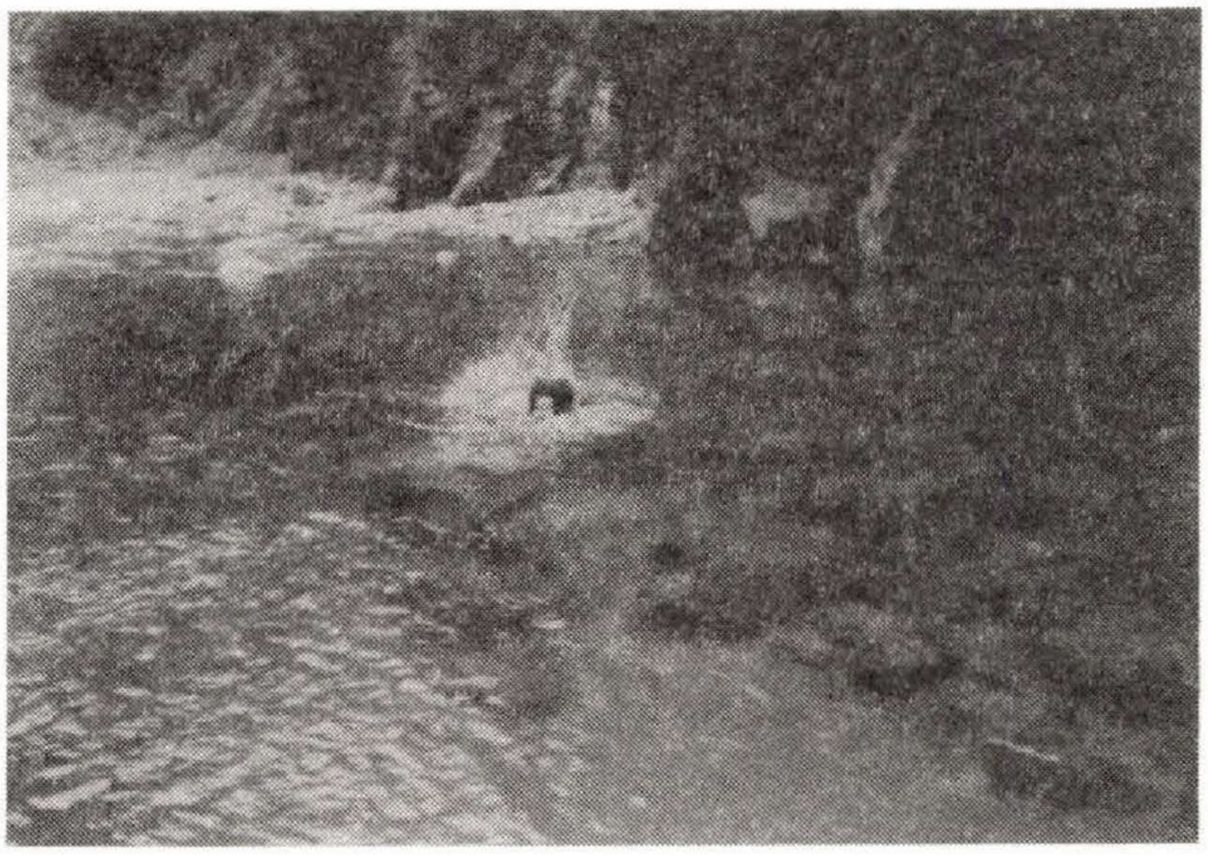
針葉樹会報

1991.3.　第76号



発行日　1991年2月28日 発行所　針葉樹会 印刷所　篠田印刷	針葉樹会報 第76号	編集人 〒206 多摩市豊ケ丘3－3－5－103 岡部晃和



下の廊下遡行（第一日目）

目　次

一月のガンジャ・ラ越え（下）……中島　寛　2
老スキーヤーの近況報告（下）……久保孝一郎　5
訃告……石井左右平　9
松木の謙ちゃん……吉沢　一郎　9
根本　大君　逝去……林　正敏　11
訂正とお詫び……宮城　恭一　12
いくらか分かりましたが……柿原　謙一　13
「山田亮三山岳文庫」の前で……柿原　謙一　14
望月さんの西天狗……上原　利夫　15
香港針葉樹会を訪問……名和　泰三　16
一橋山岳部のその後……西牟田伸一　17
細野伸二君追悼山行……井上　裕之　20
黒部川上ノ廊下遡行……近藤　泰　21
会務報告……25

表紙写真説明　**ランタン村からの夕陽に映えるガンチェンポ峰(6,397m)**

中島　寛氏 撮影

一月のガンジャ・ラ越え（下）

中島　寛

一月二十四日　快晴。昨夜は、同室の連中の政治談議に寝入りを邪魔されたこともあったが、本当のところは、高度の影響で、よく眠れなかった。これは、いつものことだが、眠りが浅いわりに、疲労が残っていない。

チャパティに紅茶、ミカン一個の簡単な朝食を胃のなかに押し込み、七時十分、小屋を発つ。昨日、ランタン村で確保したポーターが、約束どおり助っ人に来てくれ、ガンジャ・ラまで荷を担いでくれることになる。従って、私は、今日は、身のまわりの小物とカメラ二台だけ持っていけばよい。気温はかなり下がり、小屋のまわりのぬかるみも凍っている。

道は、若干戻り気味にランタン谷を渡り、対岸の尾根にとりつく。左に大きく捲きながら、広い尾根の正面に出、一気に急登する。四七〇〇メートルのコルまでは快調に飛ばし、九時十五分に到着。天気もよいし、これなら、今日中にガンジャ・ラを越えられる、とタカをくくっていたら、そこから先が大変だった。

尾根がそのままガンジャ・ラに続く広い谷に吸い込まれるところで、雪が出てきた。一月のことだし、クラストしていれば、雪渓登りの方が楽だと思っていたら、この雪が始末におえない。表面はクラストしているが、その下はザラザラの軟雪で、踏みしめても踏みしめても、足場が固まらない。その下は岩である。一歩毎にクラストを踏み割り、時には岩の間に落ち込み、膝上までもぐってしまう。荷物はほとんどないのに、まるで進まない。パサンやカジも同じだ。

やむを得ず、左岸の岩が露出している場所に登り、岩から岩へ伝いながら登るが、相変わらず何回も足場をとられる。スピードは上がらないし、なかなか高度が稼げない。けっして技術的に難しいわけではないが、ヒマラヤの大きさをいやという程知らされる。振り返れば、ランタン氷河を囲む山々が大きく迫っており、ゴサインタンまで見渡せるが、他人事のようで、実感が湧いてこない。

これだけ雪が多いと、運動靴では無理なので、十四時三十分、オシだが黙々とよく働いてくれたポーターを帰らせる（ポーター代約三〇〇円）。重くなった荷を担いで、自力で登りながら幕営地を探す。最終的に、十六時、雪の尾根上にテントを張り、仮泊することとする。高度約五〇〇〇メートル。先の見通し立たず、息苦しい気分。夕食は赤飯に漬物、味噌汁。夜に入って、風が出てくる。

一月二十五日　昨夜来の風が強いが、今日も快晴だ。ランサ・リ（六一九五メートル）の左肩にランタン谷左岸の山々がよく見える。気温も大分下がった。零下五、六度か。

変わり映えのしない、ラーメンとモチの朝食（野菜なし）の後、上下ウィンド・ヤッケを着用、七時四十五分、テント地を後にする。相変わらず雪の状態悪く、覚悟を決め、苦労しながら、左岸沿いの岩場を伝って登る。ガンジャ・ラ直下は、かなり急な岩登りを強いられ、ザイルが欲しいところだった。十時、ようやくガンジャ・ラ（五二〇〇メートル）に出る。正確に言えば、ガンジャ・ラの約五十メートル上部の棚だが、下降不能なので、そのまま休憩する。前夜は、若干の頭痛を感じたが、割合よく眠れた。行動開始後、頭痛はなくなった。しかし、倦怠感があり、何をするのも面倒くさいのが、高度の影響であろう。

前日のラッセルでの苦闘中、望遠ズームレンズが雪のなかに埋まったことが何回かあり、ガンジャ・ラでいよいよ眠前のパノラマを撮ろうとしたら、レンズが曇って使いものにならなかったのはかえすも残念だった。

実に見事な山々だった。サルバチュム峰（六九一八メートル）とペンタン・カルボ峰（六八三〇メートル）の量感が他を圧倒しているが、ゴサインタン峰（八〇四六メートル）も黒々とした、どっしりした姿を誇っていて目立つ。しかし、率直に言って、ひとつひとつの山を登る対象として凝視し、じっくりと観察する余裕はまったくなかった。喉がむしょうに渇き、頭がボッーと霞んでいた。自分で自分が情けなかった。

一時間程滞在し、十一時ガンジャ・ラを出発。滝谷のB沢のような感じのガレ場をへずりながら下降し、下部のモレーンに着いて、ホッと落ち着いた時は十二時を大分まわっていた。

後は下がるばかりだ、と考えるだけで、気分が楽になった。食糧があまりないので、なるべく先を急がなければならない。もう表面がかちんかちんになったチャパティは喉を通らない。何とか雑炊でも食べたいと思ったら、パサンとカジが小さな水場を見つけ、コケモモの枯木で焚火をして、十五分で用意してくれたのには、大いに感激した。生命を救われた思いだった。

気持ちのよいカルカが続くが、水場はない。十五時三十分さすがのパサンが鼻血を出したため、やむなく近くのカルカ（ケルダン・カルカの一部）に幕営することを決める。高度約四二〇〇メートル。今日も雪を融かして炊事する。

一月二十六日　晴のち曇。今日中に食料を補給できる部落に巡り着かないと、明日は食べるものがない。七時には最後のモチを二切ずつ食べて出発。しかし、今日も相変わらずの悪戦苦闘だ。ただ下降するだけなら、馬力だけが問題だと思っていたが、ヒマラヤの大きさは意外なところに落とし穴を用意してあった。道は、尾根をゆるやかに登り下りしながら、山腹をへずっているが、山腹にはべったりと雪がはりついているため、大変なラッセルを強いられてしまった。しかも、この捲き道が、行けども行けども尽きない。

最初のうちは、ガウリサンカール峰（七一四五メートル）やヌンプール峰（六九五七メートル）の景色を楽しんでいたが、午後になると、ガスが周囲を包み、何も見えなくなってしまった。黙々とラッセルを続け、デュクブ（三九〇〇メートル）の南側の尾根上に立ったのが、十四時一〇分、タルチョーが寒々と風にはためいていた。ここからは、パルチョーク尾根を一気に下ればよいと思っていたが、シャクナゲ林のなかには雪が多く、軟雪のため、ここでも果てしないラッセルを強いられる。食糧もなくなってきたが、固形物を段々受けつけない程に疲労が募る。濃い霧のなかを、いつ、どこに着けるあてもなく、ただひたすら下り続ける。

十六時、霧の彼方から、犬の吠え声に交じって子供の声が聞こえる。最初は幻覚かと思ったが、間違いない。思わず三人で顔を見合わせてしまった。これで何とか、人里に着けそうだ。

十七時、夕闇が迫っていたが、一軒の牛小屋に着いた。夫婦と子供四人が土間で火を囲んでいた。側には、羊や牛が同居しており、鶏が籠に入っていた。ダヒ（ヨーグルト）、チャン（濁り酒）、ゆでたジャガイモをどんどん出してくれる。昼の間、何も食べられなかったのに、チャンやゆでジャガイモはいくらでも入るから不思議だ。奥さんが、米の粉でロティ（平焼きパン）をつくっている。珍しいなと思って聞いてみたら、明日は正月だと言う。はじめてシェルパ族も、中国人と同様、旧正月のお祝いをすることを知った。こんな山奥の粗末な小屋でも正月はやってくる。そして正月特有のご馳走を用意し、家族揃ってお祝いをする。何か楽しげな、華やかな気分が伝わってくる。

たっぷりご馳走になった後は、もう一仕事だ。十八時十五分、当家の長男パサン君（十五歳）が先導してくれることになり、ヘッドランプをつけてタルケギャン（二七四三メートル）に下る。真っ暗な夜道を黙々と歩きながらせわしない、しかし充実した一人旅を反芻してみるのは楽しいことだった。タルケギャンに着いて、パサン君の親戚の家に上がった時は、二十時をま

わっていた。彼もいとこ達と一緒に新年を迎えるために一泊する。

タルケギャンは、百数十戸の石積みの家が山腹にへばりついた、こじんまりしたチベット系集落である。しかし大変豊かな村らしい。立派なゴンパがあり、どの家もしっかりした造りだ。電気もある。内部に入ると、床や家具は黒光りがする程に磨き上げられ、調度品も立派だった。茶碗類も全て景徳鎮製だったのには驚いた。再びチャンとツァンパのご馳走になり、満足して床に入る。

下　山

一月二十七日　晴。立派な家でも蚤の巣窟であることに変わりはない。またまた蚤の攻勢に身体のあちこちが腫れ上がり、ほとんど眠れぬ一夜を過ごした。

四時、各家で爆竹が鳴り響く。これが新年を告げる合図である。子供たちが、暗いうちから一斉にはしゃいで騒ぎまわる。ふと昔の子供の頃のことを想い出した。

元旦のご馳走は、ロティが中心で、卵焼き、菜っ葉の漬物がきれいに盛りつけてある。ツァンパとバター茶も当然出てくる。

ゆっくり食事もとりたかったし、美人郷として名高いタルケギャンを観察したかったが、時間がない。今日も十時間以上歩く長丁場とのことで、七時に出発する。しかし、正月休みが幸いして、雇い人のタマン族が二名、ポーターとして、われわれの荷物を担いでくれることになった。従って、今日は、三人ともほとんど空身である。はじめて、ゆっくりと三人で話をしながら下る。

タルケギャンの村のはずれから、マルムティ・コーラまで、約一五〇〇メートルを一気に下る。途中で、フランス人一家とすれ違う。ティンプー着九時。ここからキウルを経て、モハンカールまで、メラムチ・コーラの左岸沿いの道は、典型的な農村風景が展開し、のどかだ。

吊り橋を渡って、モハンカール着十一時、昼食。といっても、ボソボソの米飯にダルをぶっかけて、無理やり喉に流し込む。なまぬるい気の抜けたミリンダも薬のようだ。

ここから先は、メラムチ・コーラ右岸沿いの街道で、景観も亜熱帯性のものに変わる。昨日までは寒さに震えて羽毛服を着ていたのに、今日は暑さにうだる程だ。冬にもかかわらずサボテンの花が咲いていたり、バナナが実っている。途中で、インドラワチ・コーラと合わせて、インドラワチ河となるが、ここが、あれだけ苦労して下ってきたパルチョーク尾根の末端である。

街道だけにとたんに行き交う人々の数がふえる。顔立ちはインド系が多い。これはネパールのどこに行ってもそうだが、トレッキング道は、何百年前から出来ている地元民の生活道そのものだ。幾つもの村のなかを通っていくから、彼らの生活ぶりを嫌でも垣間見ることになるが、貧しさに胸を衝かれる。動物と一緒の汚い家に住み裸足や粗末なサンダルで重い荷物を担いでいる姿は、ランタン谷のチベット人と同じだが、山のなかでは、何か人間の生活の豊かさを感じ、下界に下りて、亜熱帯性の環境の下にいると、貧しさのみ意識する。その理由は自分でもよくわからない。多分、生活意識に関わりのあることなのだろうし、文明と文化の問題でもある。共通しているのは、子供たちがどこに行っても多く、明るく、その目がきれいなことだ。ふと二十年前に、エベレスト登山を終え、ナムチェバザールから河野君という地球物理学者の隊員と二人で、二週間のトレッキングをして、ダンクータに出てきた時のことを想い出した。私自身は、挫折感にさいなまされていた。何をするのもおっくうだった。しかし、シャングリラという峠を越えて、ダンクータの町に下り、久し振りに、人間が行き合い、あれもこれもごっちゃになった雑踏のなかに身を置いたとき、ここが人間が生きている原点なんだ、もう一度最初からやり直してみようと思った。この街道の風景も、あの時のダンクータと変わりがない。しかし、あの時は、貧しさなど意識もしなかった。

一七時、目的地のシバガトに着いた時は、精

も根も尽き果てた感じだったが、充実感があった。

定期バスも終了、タクシーも出払っていたが、翌朝出発のため待機していたバスの運転手にチップ（といっても、日本円でわずか二千円だが）をはずみ、カトマンズまで一走りしてもらうことになった。座席のシートはハガされて何もない。木の板を張った床は穴だらけ。ところどころ、走っている道路が見えるようなオンボロバスだったが、気にもならなかった。何とか二十一時にはカトマンズに帰り着き、熱い湯の出る風呂に入ることが出来た。うすぼんやりしたカトマンズの灯が輝いて見えた。

来年の同じ頃は、飛行機をフルに使って、トロン・パス越え（アンナプルナ北面）をするつもりで、既に準備を始めた。ご興味ある方は、早めにご連絡下さい。

老スキーヤーの近況報告（下）

久保孝一郎

四月六日　晴、成田をソ連航空アエロフロート機で正午出発、途中、上越国境の雪山、新潟平野、日本海、佐渡ヶ島、大陸の雪山、凍原地帯が眺められた。モスコウでチューリッヒ行きに乗りつぐのが予定時刻では二時間待ちだが、空港内に掲示時計なく、O氏の電子手帳の地球時計で現地時間に合わせたところ（日本との時差六時間）、結果的にはそれが一時間遅れで、あやうく乗り遅れるところだった。モスコウよりチューリッヒまで約三時間、途中でようやく日没となり、現地時間二〇・五五に到着、この日照時間の永いのが時差ボケの原因となるのであろう。

空港地下駅から国鉄で中央駅へと行き、ベッーでグロッケンホーフ・ホテル、さらにタクシドインしたのは二三時（日本時間七日の五時）頃、疲れました。

四月七日　曇、出発前にフロントに東京で予約してなかった、一五日夜のチューリッヒの宿に、O氏推奨のキントル・ホテルの予約を依頼する。徒歩で中央駅に向い、約一五分で到着、ローザンヌ方面行きの列車に乗るのに、二度も乗り間違え、三度めの正直でやっと正しい列車に乗ることができた。その間違いの原因は、ホテルでくれた列車時刻表に番線の出ていないこと、駅員との対話に会話力の不足のこと、各車輌に行先き表示のプレートがない（二輌おきにあった）こと等で、総じて慣れていないためで、以後要領が分かった。

途中ベルンでインターラーケン行きに乗りかえ、インターラーケン・オスト駅で下車、手前のツーン湖畔の、桜や桃の赤とレンギョウの黄の開花と農家とを合せた風景はまさに泰西の名画を見る想い、日本とスイスとこの春は二度の花見ができた。それより登山鉄道にまた乗りかえ、グリンデルワルトには正午すぎ到着した。雨天で雪の消えた街の中を二晩の宿となるシュピンネ・ゲスト・ハウスに赴いた。

この日は駅前にある日本語案内所（日本人が三人詰めていた）でスキー場情報を仕入れてから、時差ボケで疲労のとれぬ体をベットに横たえ、夜は近所のレストランでスイス名物料理のホンデュウを食べたが、胃の調子の悪くなった私には格別うまいとは感ぜられなかった。

四月八日　街は小雨、山は小雪とガス。

さあー今日から念願のスキー開始と張りきりたいところが、何としても天気が悪い。まず四段リフトでフィルストに行く。駅員が防寒用の厚手のマントを着せてくれた（夏には毛布の膝かけをしてくれた）。ここは横むきの座席で、好天ならば風景を楽しめるのだが、足元の斜面しか見えず、上半分になってようやく雪が続くようになる。

最初スキー客は私らだけで、このガスでは身動きもできず、終点の食堂で絵葉書を見たりして暇をつぶしていたが、やがて地元のスキーヤーが上ってきて、オーバーヨッホのTバーリフトで上り始めたので、私らもそれに従った。そしてシュプールをはずさぬように恐る恐る滑ったが、滑降の快感は少しも味わえない。それでも午前中五回ぐらいやり、時たまガスが切れて周辺の山が姿を現わす。

昼は食堂でビールとスパゲティ、その量の多いこと老人の胃袋には食べきれぬ。午後は早々にスキーをやめ、宿に帰る。八八年夏来た時は、リフト終点から登りはじめ、バッハアルプゼーという湖水まで行き、ここで女性参加者グループの大合唱があって、楽しい想い出の地であっただけに、初日のこの日の悪天が残念である。

四月九日　前日同様ガスと小雪。

今日はヴェンゲンへの移動日で、スキー場は登山鉄道で中間駅のクライネ・シャイデックとする。荷物は日本語案内所で教わってヴェンゲン駅止めのチッキにした。

ファルボーデンのTバーリフトを使ってその斜面を滑ったが、円板のついたポールとシュプールを見はずさぬよう注意し、万一方向不明となりそうな時は、じっと佇んで地元スキーヤーの姿を待ち、それを追いかけるようにして下る。時たまガスが切れた時は、地形を頭に入れるよう努める。スピードの出せぬ、面白くないスキーだが仕方ない。

ガスが切れた時の景観は、ユングフラウ、メンヒ、アイガーと素晴らしいものになるが、スキーは斜度も少なく、面白くない。駅でユングフラウ・ヨッホ駅に向う日本人団体客を見かけたが、眺望には恵まれぬだろうと、他人事ながら気にした。

これから二夜の宿は駅前のアイガー・ホテルである。因みに同名のホテルは他にもこの周辺（例えば、ミューレン）にあるので、地名〇〇のアイガー・ホテルと断らぬと混同される恐れがある。

なおこの地方には地名の終りにeggとつくのが多いので、辞書をひくと「織縁、布のミミ」とある。たぶん断崖の際（キワ）を意味するのではなかろうか。

四月一〇日　前日同様ガスと小雨。

今日は登山鉄道でラウターブルンネンに下り、ロープウェーでグリュッチュアルプに上り、電車でミューレンに行き、ロープウェーでビルクに上り、先ずエンゲタール（狭い谷間）のTバーリフトを使い、この斜面を滑る。相変わらずガス深く、スピード出せず、面白くない。一滑りした後、さらにリフトで〇〇七のロケ場所で有名なシュリトホーンに上る。ここからの滑降を楽しみにしていたのだが、怪我でもしてはならぬとまたロープウェーで下ってしまった。帰途ミューレンの街を歩き、坂倉女史の定宿で、私も三泊したことのあるホテル・エーデルワイスの前を通った。街は霧の中に沈んで寒々としていた。

四月一一日

今日はヴェンゲンからツェルマットへの移動日である。乗車時間まで街中を散歩して写真をとる。ここはツェルマットと同様、自動車乗入禁止地帯で、グリンデルワルトより静かで落着きのある街だが、時節がら昨日のミューレン同様寒々とした印象は拭えない。

インターラーケンにもどり、シュピーツで乗りかえ、レッチェンベルク・トンネルをくぐりブリーク下車。ここより登山鉄道でブァリス（谷）を通ってツェルマットへ行く。この谷を遡る景色は、ぶどうの段々畠が天に届かんばかりに上に伸びて、ワインを飲まずにはいられない気分にさせられる。

ツェルマットには昼すぎ到着、予約してある駅に近いゴルナグラート・ホテルに荷を置き、街中のレストランに遅い昼食をとりに行く。途中に日本国旗の出ている土産物店により、ここに日本人店員がいるので情報を仕入れると、夕方五時から駅前旅行案内所に山田さんという日本人がつとめているから、その方より情報を得るよう教わる。街のメーンストリートは電気タ

クシー（一般車乗入禁止）と馬車と各国からの旅行客でリゾートの街の雰囲気がある。

四月一二日　やっと晴れた。

今日はこの晴天を利用して、今回ツアーの最高所クライン・マッターホーン駅三八二〇米に上り、その下で滑ることにする。街はずれのロープウェー乗り場から三段で達する。さすが四千米近い高所だけあって風は強く、寒さで手先きが冷い。ここから下の駅トロッケナー・シュテクまで滑り下り、ここより上る二本のTバーリフトを使い練習するが、全般に雪原と言ってよいほど斜面がなく、またゲレンデ上部の斜度のある所は向い風が強くスピードは出ず、滑降としては面白味を減ずるが、それを償う以上のマッタホーンの景観は、やはり来てよかったとの感慨を深めた。午後帰る時間になって、マッタホーンへとりつくロープウェーの中継駅フルグへ下った。これは斜度もあり面白く、さらに下の中継駅フリーに下ったが、このコースはよかった。やっとスキーをしたという実感が出てきた。ここから下は雪がなくロープウェーでツェルマットへもどった。充実した一日である。これも好天のおかげだ。

四月一三日　晴後曇り。

今日は登山鉄道でゴルナーグラートに上り、さらにホーテッリー、シュトックホーンと二段のロープウェーで上る。上部はコブの多い斜面なので、私は敬遠して、またゴルナーグラートまで下り、下の駅のリッフェルベルグまで滑降し、ここから上る二本のTバーリフトを使い練習する。午後はゴルナーグラートからブライトボーデンに滑降、さらにリッフェルアルプ駅まで林間を滑る。ここで初めて欧州アルプスの針葉樹林の林間滑降を経験する。今日も充実した一日であった。

四月一四日　ガスと小雪。

今日は地下ロープウェーでズッネッガに、さらに地上ロープウェーで、ブラウヘルト、ウンターロートホーンと二段に上る。ガス深く終点からの滑降を断念し、中間駅とズッネッガの間を滑るが、ガスと斜度不足で面白くない。

午後ガスの切れ間をねらいナチォナルに滑降、この間空中リフトがあり、スイスのスキー場では珍しい。

四月一五日　ガス午後暫時晴れる。

今日は一昨日滑ったゴルナグラート下部で再度やることにし、私はリッヘルベルク駅とリッヘルアルプ駅の間を、登山鉄道沿いにあるコースをもっぱら滑った。午後は晴れ間を狙いゴルナグラートから再度ブライトボーデンへ下り、ここで右してグリュンゼー（線の湖の意、氷結しているのか湖水は見えず）経由、ガントに下り、ここからロープウェーでブラウヘルトに上り、ガスっているので、ロープウェーでズッネッガに下り、地下リフトでツェルマットへ帰った。

このガントからのロープウェーにより、二大スキー場がよく連絡されているので、大規模なスキー場だという印象を深めた。日本で例えてみると、八方尾根と岩岳のスキー場をロープウェーで連絡させたようなことだ。

四月一六日　晴のち曇り。

今日はシャモニーへの移動日、晴天でマッターホーンが見送ってくれる感じだ。

登山電車でヴィスプへ下り、ローザンヌ行き列車に乗り、マルティニでまた登山電車に乗りかえ、国境を越え、フランスのシャモニーに行く。宿は旅行案内所の近くのパーク・ホテルで、荷を置き早速日本料理店へ情報を仕入れに行き、帰りの航空券の再確認手続き先の旅行代理店を教えてもらう。

四月一七日　晴。

案内所のわきからスキーバスが出ており、スキー初日はバスでアルジャンチェールに行き、二段のロープウェーでグラン・モンテ三二七五メートルにつく。ここから中間駅ロンニャン一九六五メートルまで高度差一三一〇メートルの大滑降が楽しめる。右に氷河を眺め、針峰群に囲まれたこのスキーは今回ツアーのハイライトであった。日本で例えれば乗鞍肩、小舎から鈴蘭、または岩木山頂上から麓ぐらいの高度差に

相当するだろうが、景観が本場アルプスだから滑降気分は全くちがう。

午後はロンニャンから二本のリフトのうち長い方のを使い練習したが、斜度もあり私には好適のゲレンデであった。充実した一日。

四月一八日　前夜より雪、午後曇り。

今日はスキーバスでプラに行き、ロープウェーでまずフレジェール一八九四メートルに上る。ガス深く、意気あがらぬが先行者について、リフトでアンデックス二三八五メートルに上る。夜来の雪は三〇センチ以上つもり、シュプール定かならず、雪崩の心配もありそうな斜面を標識ポールと先行スキーヤーの姿を頼りに滑る。ガスに妨げられ、何も印象の残らない凡凡スキーだった。

四月一九日　曇りのち時々晴。

今日はスキーの最終日、シャモニーの街に最至近のブレヴァンをめざす。最至近とはいえロープウェー乗り場へはかなりの上り道なので、無料スキーバスを利用したが、集客のため街の中を右往左往するので異邦人には方向感覚がおかしくなる。

乗り場には九時前についたが、閉門のままで、日本では考えられぬ悠長さである。のんびり屋のフランス人たちも騒ぎだし、やっと九時半頃開門となった。その間係員の事情説明など全然ない。これも国民性の故だろうか？

最高駅ブレヴァン二五二五メートルの付近のガスがなかなかとれず、中継駅プランプラの周辺のゲレンデで滑る。緩急さまざまで面白い。午後ブレヴァン頂上のガスが切れそうになるのを見込み、頂上直下のコースを滑る。案内図には難路とあるが、無事に下る。下界は晴れていて、ハングライダーの空に浮かぶさまや、晴れ間にはモンブランの雄姿が見える。長いスキー行もこれで終り、無事が何よりと思いつつ一抹の感慨を禁じ得ない。

四月二〇日　晴。

今日はシャモニーからチューリッヒへの移動日である。来た時と同じ登山電車でマルティニに出て、ローザンヌ行きに乗り換える。ローザンヌの手前レマン湖畔ではだいぶ春色が濃くなってきた。花は咲き、若葉はもえはじめた。特に黄色の菜花畑のようなものが車窓から見え、もう過ぎてしまっただろう日本の春景色を回想した。

ローザンヌでさらにチューリッヒ行きに乗り換える。またもやスイス最初の出発点であるチューリッヒにもどり、タクシーで今宵の宿キントル・ホテルにつく。地下のレストラン（ヨーデル等のショウが毎夜ある）にディナーを予約して、観光に出かける。スイス一の大都会だけあって街の中心には立派な店が軒並みで、湖畔の公園も立派である。

四月二一日　晴。

朝食後中央駅に行き空港駅まで鉄道に乗る。空港でスキー、荷物をチッキにし、土産物を買い帰国のしたくを一切終え、やれやれである。一一時空港発モスコウ一六・一五（現地時間）着、約四時間の待ち合せで東京へ出発。

四月二二日　小雨。

予定どおり成田一一・二五着。家人の出迎えでホッとする。

七、回顧と展望

今回のツアーでは日数の関係で、グリンデルワルトではメリッヘンのスキー場、ツェルマットではクライン・マッターホーンからテオドルパス経由イタリア側、シャモニーではレ・ズーシュからベルビューを割愛した。またの機会を期そう。我が老人スキーも海外で五年、国内で一五年は続けたいと思っている。

次回の海外スキーはオーストリーのアールベルクスキー術発祥の地、インスブルック方面とスイス・サンモリッツかダボスを狙いたい。また国内では三月下旬西穂高のロープウェーを利用して上高地に入り、奥又白池まで行ってみたいと思っている。同行の士を求む。

訃告

松木謙三氏　昭和三年卒業
平成二年八月一八日
急性肺炎のため逝去
葬儀は八月二二日　荻窪の長命寺で行われ会員多数が列席した。
松木さんは会の創立以来の会員であり、生涯針葉樹会を愛されてきた。又、昭和六一年には会に御寄付を頂いている。

根本大氏　昭和一七年卒業
平成二年一一月一〇日
肝不全のため逝去
一一月一二日　大森の御自宅で葬儀が行われ多くの会員が参列した。
根本さんは亡くなるまで当会の評議員として御指導頂き、又会の動向に御心配頂いた。
松木、根本両氏の御冥福を心からおいのり致します。
石井記

松木の謙ちゃん

吉沢一郎（昭三学）

ここに、黄ろく色褪せている、今から63年前の2・10・31と、左下隅に年月日の小さく書いてある古ぼけた写真がある。

この記念写真（横19糎、縦13糎）のバックには、中位の太さの公孫樹（いちょう）の樹が三本立ち、その右側に二階建ての木造の仮校舎がある。これで見ると、大正12年の関東大震災のあとで建てられたものであろう。4年しか経っていないのでまだ小奇麗だ。公孫樹は震・戦災にも生き残ったと見え、現在では如水会館の裏手、いまだに古色蒼然たる一橋講堂の前に、直径60糎はある大樹になっている。冬になると葉を落し、春になると緑の葉をこんもりと繁らせて、昔を偲ぶ縁（よすが）になっていてくれる。

このキャンパスに入る古い錆のついた鉄の門も多分元の侭で、大正11年（1922）にAlbert Einstein夫妻や経済原論の福田徳三博士らが通り、待ち構えていた私が彼らのスナップ写真を撮ったところに近い。

さて背景のことばかり書いていても仕方がない、肝心のことに移ろう。よく視ると皆が皆角帽を被っている。この角帽は当時の早稲田のもののように尖っておらず、角が柔らかくなっていた。

中にたった一人、羽織、袴の変り者がいる。これは千葉県は大原の網元の長男で、勉強も出来たが遊び人でもあった。われわれは山登りの合間をみて、夏にはよく大原海岸の気分を満喫しに大挙して泊りに行ったものである。

此処に写っているのは大正11年に、東京商科大学の予科に入学した仲間の内の約1／5で、風雲会（これは私の命名）の会員であった。この写真には31名しか写っていないが、ボヤボヤしていて写す時に間に合わなかったのや、全然忘れてしまっていたのもあろう。一、二番で卒業するだろうと思われていた秀才が卒業寸前に死んでしまった、というような例もある。

最上段の9名と、最前列の10名も、既に過去の人達となっている。よくもこう沢山次々と死んで行ったものである。

こんなに大勢いて今も尚生きているのは中列に立っている人だけである。（H2・10・31現在）何と気持ちの悪いことじゃありませんかね。

真中で角帽をややいなせに被ったように見え

る小柄なのが私で、向ってその左が松木の謙ちゃんである。謙ちゃんがまた出てきて安心したでしょう。私も自分が書いていて謙ちゃんがなかなか出て来ないので困っていたが、諸君もこれでホッとしたことと思う。

この謙ちゃんが私の直ぐ左にいるのは何故だろうか。それは彼が私同様山岳部の一員で、山やスキーの合宿にいつも一緒に行っていたからである。

これに対し、私の向って右にいる背の高いのは誰だろう。これがタイちゃんなのである。今を時めく森泰吉郎、目星しいところへニョキニョキと高いビルを建て廻っている、森ビル株式会社の社長の森君なのである。

私達が芝の桜田本郷町（今の西新橋の四ツ角付近、丁度日石ビルのある処）に住んでいた頃、彼と私は同じ大倉商業に通っていた。彼の家は米屋で、筋向うの横丁にあった。親父が虎の門から新橋へかけての土地を沢山持っていたとか。土地を持っておればビル建てには鬼に金棒というものであろう。

大倉商業と言えば当時東京では名門校の一つで、入学が大変難かしかった。明治の大実業家であった大倉喜八郎さんが創設したもの。私は明治中学の二年から大倉商業の本科一年に転校した。

本科でタイちゃんは二部、私は一部の方にいた。大雑把に言えば二部は英語に力を入れ、一部の重心は算盤に置いていたらしい。子飼いと編入では二年の差がある。子飼いの方はもう二年間毎日算盤をやって来ていたのに対し、編入の方の私は算盤なんてやったことがない。

だから算盤の時間になるといつも手の平に油汗が滲み出て来た。暗算もあった。私もこの野郎とばかりに、明けても暮れても算盤々々で苦労した。鰐辺という先生だったことを今だに覚ている。

一橋の予科には一年間算盤があった。中学から入った人達の一番困ったのはこの算盤だったらしい。算盤の鬼才とも言うべき川村さんが先生だった。敵は鉛筆一本で算盤をはじく。

試験の時などは私達商業出の者の最も得意な場面で、〝何でも御馳走するから答えを教えろ〟なんていうメモ用紙が廻ってくる。大倉三年間の苦労の実ったことが何度もあった。

算盤では得（とく）をしたが、ドイツ語なんかの場合になるとこの逆で、この単語の意味を教えろ、なんていうメモを出してその場を凌いだこともあるから、結局は相見互いということか。

何だかマンザイの台本みたいなことになってしまったが、そろそろ本筋に戻すことにしよう。

最後に生き延びているのが、タイちゃんの右、一人おいたところにいる山林君（台湾から来て日本人となる。）昔の台湾名は周耀星。弁護士をやっていてなかなか忙しいらしい。結構なことだ。毎月如水会館でやっている昭三会の中食会にもよく出てきてくれる。真面目な紳士である。

このところ、86才前後の会員が多く亡くなった関係で、昭三会の例会への出席者が頓（とみ）に減り出している。淋しき限りである。そのうちに未亡人の出席の方が多くなることであろう。

ここでやっと松木の謙ちゃん中心の話になる。何故謙ちゃんに〝松木の〟を加えるかというと、われわれの山岳部というより、針葉樹会には謙ちゃんというのがもう一人いるからである。多言を要せず、それは柿原謙一君のこと。彼は秩父市（昔は秩父大宮と称した）の名門の子孫、昭和12年学卒であるからカンちゃんこと望月達夫君の一年先輩に当たる。

山岳部が旧一橋の半円形、階段式の化学教室で呱々の声を挙げたのが、大正11年の5月頃だったかと思う。創立者は金田近二氏、中川孫一氏、奥野綱重氏、それに新潟出身の松倉栄司氏などで、この最後の人はわれわれの一年先輩で、中川、奥野の両氏はわれわれの世話を充分にされたあと他界されてしまった。

創立の年の終りの冬に、山岳部は野沢温泉の酒屋（酒を売っている店ではなく、大きなドッシリした黒光りの太い柱を使っている宿屋であった）で第一回目のスキー合宿を行なった。

どうしてここで最初のスキー合宿をしたか、

その由来は定かでないが、北信方面の雪の事情にくわしく、且つスキーもうまかった松倉氏や松木の謙ちゃんあたりがアレンジしたのではないかと思う。この酒屋でスキー合宿を学校単位でやったのは一橋が最初である、ということをあとで知った。

（続く）

根本大君逝去

林　正敏

平成二年十一月十日午後三時十四分、根本大君はこの世を去った。享年七十才である。

暫らく東京を離れていた小生が久し振りに彼に会ったのは昨年七月三十日。亡妻の供養の席で、彼らしい心のこもった慰めの言葉と元気そのものの顔が想い出される。改めて、久し振りに二人で一席やろうと思っていた矢先に、胃の切除手術をしたとの令夫人の電話。予後の経過良好との本人の電話。今年に入って四木会に五月二十四日出席。その、前よりは痩身とはいえ彼らしい明澄の面持。そしてその席で、亡妻の三回忌に出席を約した彼は今は亡い。

アサヒグラフ十一月九日号の表紙に紅葉の北沢峠から臨む甲斐駒の跳望が出ている。懐かしい山容である。甲斐駒、千丈の山行は小生にとっては、山岳部に入って根本と二人組んだ数多い山行の初めであった。そしてこの北沢峠には忘れられない想い出がある。

甲斐駒登頂後、秋日快晴のもと北沢峠に向かったが、二人共五万分の一の読みちがいか、五万分の一の誤りなのか、進めなくなってしまった。日没まで一時間強を残すだけで、不安がつのった。その時、彼は高度が可成り低くなっていること、ガレ場の見通しがきくこと、北沢小屋との距離が近いと推定されることを挙げて、未知の道筋を下ることは常道ではないがと言いつつ、沢下りの納得を求めた。下り切って、ケルンを積んだ縦走路、右に北沢小屋の煙が見えたところで彼は握手を求めてきた。沈着にして冷静な判断力を持つ彼の資質を知るこれが最初であった。昭和十四年十二月、大塚、山田滝谷第四尾根冬期完登のメンバーに、彼は佐藤政雄と共に選ばれてサポートをはたしている。

彼が逝った日、十一月十日から五十年前、昭和十五年十一月十日は皇紀二千六百年の記念日であった。この日、彼と共に夕闇のなかを山から下っていた。

山日記を失っているのでどこの山だったかさだかではない。村落に近づくにつれて妙に明るい。狐の嫁入りでもあるまいがと冗談をいうと視力の良い彼は「セイビン（小生の名前の音読）あれは提灯行列だぞ」という。

「ああ提灯行列か」。あとは二人共黙々として下山した記憶が甦ってくる。そしてこの記憶は翌十六年に入ってくる。時代の激しい動きのなかの部生活の想い出につながる。

二千六百年の祝賀は日中戦争から日独伊同盟を結んだ当時、国威発揚の為の記念行事であったが、世の中は東大の平賀粛学、出版物発禁の暗い影を引いて、一方砂糖・マッチの配給統制が始まり、米の配給統制、はては学生の長髪禁止が取り沙汰されるさなか、山岳部には二千六百年の提灯行列どころではなかった。十六年に入ると言論、出版取締りは強化され、米どころか必需品の全面配診統制に入って山岳部の器械、物資の調達も益々難しくなってきた。

この暗い影を投げかけるなか、山岳部は時代認識に勝れた山田亮三が指導していたが、勝れているが故、独り悩んで表われる落ち込み（表現に穏当を欠くが）とその同級・下級部員に及ぼす精神的揺れがあった。重苦しい対話の継続から一転して笑いとばす部室のなかの揺れる空気が想い出される。既に山田は逝った。そして今は根本も亡い。厳しい時代の山岳部の在り方

について二人がどのように話し合ったのか、最早や詳かではない。ただ、落ち込む山田に対して、揺れ動く部員に対して、自らも不安を抱きながら根本の注いだ善意と包容力を、小生は高く評価している。

古いアルバムにセピヤ色に褪せた山のスナップがある。根本と小生二人だけが丸坊主頭に握り針巻をしている。昭和十七年の夏山合宿で、彼と組んだクラック尾根登攀後のものである。登頂直後、眼の前の縦走路に新入生の石井現会長外数人が居合わせて「きた、きた、」と拍手をされた記憶がある。ザイルが払い落とすクラック尾根特有の落石に気をつけながら地下足袋が熱くなる炎天の登攀。彼の自慢の敷革が揺れていた。

この登り　夏の日焼けつく　岩ばかり　大子

登攀後数日して小生に見せた後、彼はこの句は気に入らないから直すといった。然し、小生には山岳部を去る最後の、根本と組んだあの日のクラック尾根登攀をまざまざと想い出す句で、今でも忘れないでいる。

丸坊主の二人はこの年十月、海軍と陸軍に別れて入隊した。

彼が昭和十三年、山岳部に入ってからの山歴については、針葉樹第十一号の「十号以後の歩み」、山田と小林の記述から彼の活発な足跡を読み取ることができる。その数々の登攀の評価については外に語る人があると思うので控えるが、今は亡き大塚武先輩、山田亮三と共に勝れた指導者の一人だったと思っている。ソフトな下級部員の指導振りには独特のものがあった。そして厳しかった時代の多難な山岳部を担わねばならぬ一人であった。

葬儀の日。会葬者への令弟根本二郎氏（日本郵船株式会社社長）からのご挨拶のなかに彼の病床の句が披露された。

世を閉じて
はや幾日か秋進む　大子

石井会長の先輩をたたえることばの後、針葉樹会員が久し振りに山讃賦をうたって柩を見送った。

訂正とお詫び

宮城　恭一

針葉樹会報第七五号（前号）の一一頁に「小谷部全助、森川真三郎両畏兄の追想」には小谷部、森川両氏とも凍傷を負われたと書きましたが、凍傷を負われたのは森川氏であり、小谷部さんは何でもなかったのです。またあの時登られたのは森川さんと船本さんで、小谷部さんは救助に当られたのです。どうしてこんなミスないし感違いして書いたのか、老人ボケの前兆としか考えられません。思い起こせばこの事故の直後、東京にて小谷部さんの元気な姿に接していたのにと考えると汗顔の至りです。ここに慎んでお詫び申し上げます。

いくらか分かりましたが

柿原　謙一

夏には北アルプスの一角に立つ――これは私ののぞみだが、山田（亮）さんのいない昨年は、能郷白山二泊三日の山旅のほかは、秩父市周辺の日帰り山行だけに終った。

今年になって、穂高町に自宅をもつJACの岡澤さんの好意で、同家一泊、一ノ沢ルート常念岳に往復できた。

同氏は87年に『スイス山案内人の手帳より』（ベースボール・マガジン社）を、出版されている。戦前アルプスに登った日本人の喜びと感動が、鮮やかに記録されている。この岡澤氏と常念岳往復の旅で、親しく語りあい、私はよき教示をうけた。忘れられぬ山旅である。

私の関心は、いまわが国ではやってきたというフリークライムについてであり、話はこれに集中した。休憩や小屋での同氏の話を、私なりに要約してみる。

(1)岡澤さんは、スイスの人たちの登山態度は、登山はスポーツであり楽しいものだと思っており、危険なものとは考えない。日本では、登山ははじめから危険視されている。大きい相違がある。

(2)ヨーロッパの登山者は、楽しいスポーツを楽しむべく、基礎的訓練を充分に行う。フリークライムは、近代アルピニストからでてきたものだが、そのため部屋などで、まず手がかり・足がかりがある木造の壁を作り、ザイルをつけて練習する。ついで野外の岩壁（ゲレンデ）などで練習するが、この場合もザイルを用いて、上から確保され、滑落時の安全手段を構じる。本格的フリークライムは、このあとで実行する。

(3)しかし登山はまた冒険（アドベンチュア）である。絶対に事故はおこさぬように訓練はしていても、避けうべき危険と避けうべからざる危険とがある。だから登山は冒険でもある。

(4)ここまで反省してみると、日本でいま流行してきたフリークライムは、ほとんどが基礎的訓練なしに、ただ外国でできた果実だけを受けいれているのではあるまいか。摂取の仕方に、甘さがあろう。

私なりにまとめてみると、以上である。

ここで私は、外国文化摂取につとめた日本の先輩を偲んで、いささか淋しくなった。

E・O・ライシャワーは、『円仁　唐代中国への旅』（日本語訳・原書房）で、一千一百年前に円仁（のちの慈覚大師）が、中国仏教摂取のため、その生涯をかけ、身をもって体現した上代の中国と日本との文化交流の物語を刊行した。外国文物摂取にひたむきだった日本人の姿である。

降って近代アルピニズムを、日本に導入した槙有恒さんがある。『登高会会報』第35号で、昭三卒の内田勇三氏は、アイガー登山講演会での部長教授鹿子木員信氏の講演内容を回想し、「槙君の成功は決して一時の僥倖によって得たものではなく、グリンデルワルトに止どまる二カ年の間……人力がなし得る凡ての鍛練と、凡ての準備を尽した上での断行である。……大自然の神厳にして永遠なる真理の殿堂の扉開く所の努力こそ真の修業、真の学問に外ならない。」と紹介した。外国文化摂取のためのひたむきな態度は、円仁の唐代中国への旅におとるまい、と私は思う。

フリークライムも外国文化の所産である。果実だけうけとって、それが生まれた訓練・技術の摂取を、ないがしろにする甘さは許されまい。ことは人命にかかわるのである。岡澤さんからの話、円仁の話、鹿子木講演などを結んでみて、私はいくらか分ってきました。想えば小谷部さんのひたむきだった綱と金物のさばき方の訓練の熱意は、部室前の松の大木に、ピトンまで打ちこんで、後輩の訓練に資したのであった。

（90・8・6）

「山田亮三山岳文庫」の前で

柿原　謙一

一九八八年十一月二十五日山田亮三さんは逝去されてしまった。御遺族は山田さんが丹念に集めていた山岳文献を、同氏が創業者の一人でもあり、またこよなく愛してきた信濃大町のエコノミスト村センターに寄贈された。

倉知敬さんはじめ山友数名は、蔵書をはこんで整理整頓の労をおしまなかった。『山田亮三山岳文庫蔵書目録』(長野県大町市エコノミスト村クラブハウス内　一九八九年八月作成)もつくり、関係者に送り、『山田亮三山行譜』は倉知さんの努力で、翌年一月に発行された。

ところで私はまだこの文庫をみていない。思いついて、山田さんの三周忌前にと、十月二十九日あずさ9号で安曇野へ発った。関東の空は曇っていたが、やがて甲斐駒の頭から鋸の上部が現れ、松本に近づくと冠雪した穂高がみえ、松本をすぎると雪で薄化粧した常念や大天井がでてきた。北の空は晴れている。しからばと白馬駅まで直行する。さすがに蓮萃から爺・鹿島槍・五竜・唐松・白馬三山は見事な真白さで、青空の下にそびえていた。亮さんよ、久しぶりに来た甲斐があったよ、と口ずさむ。

駅前で臼碾きのそばを食べ、Uターンの車中で再度後立山とすみ切った青空を眺めつつ、夕刻大町で下車する。亮さんとよくたちよった駅前のコーヒー店「かじか」で、久しぶりのコーヒーを飲む。エコノミスト村に着いたのは、真暗になってからだった。管理人の石田夫妻にあうのも、久方ぶりだ。

『山田亮三山岳文庫』は、新しい木製書棚によく並べられ、整理整頓されて、炉辺ちかくにあった。よくも亮さんこんなに丹念に集めたものよ、とまず感嘆した。

文庫は蔵書番号を附して並べられ、RY—I(和書・一般書)が二六四部、RY—II(翻訳書)が一〇一部、RY—III(小冊子・遭難関係・小説・ガイドブック)が八六部とある。合計四五一部となる。RYは亮三・山田か。

文庫の中には、もちろん木暮・田部大先輩等の本もある。しかし圧倒的に多いのが、近代アルピニズム登山の文献で、学生時代の一九三九年十二月大塚さんとともに、滝谷第四尾根厳冬期完登の記録を作った人にふさわしい蔵書であった。

この書棚を眺めただけで、私は山田さんの山に登る心にふれえたと思った。五十歳代をすぎても、あれほど日本の山々に登った山田さんは、自分の体力に適した山を選んで登ったのだが、登山の本領はアルピニズムだという信念を堅持していた。後輩の海外遠征に対して、協力支援した態度からも、これはあきらかであろう。

文庫の前で私は、炉火を煙草火にして、山田さんと再会したわいと感じ、槙先輩の『山行』(大修館覆刻本)をとりだして眺めた。

炉火は燃える。私の登山は田部先輩の山旅に傾倒したので、亮さんの態度とは併行線だった。しかし年齢のおかげで、二人はよく同行登山した。日本の山の秋や新緑を愛する心に、あい通ずるものがあったのだろう。

文庫が大町に居を定めたことは、後立山を好んだ山田さんにとって本望であろう。

入浴して個室に戻り、私は白馬錦のカップで酔い、深い眠りにおちた。(90・11・3)

望月さんの西天狗

上原　利夫

東天狗には登ったが、目の前の西天狗へ足をのばさなかった人は多い。わが望月大先輩もその一人である。一九九〇年六月三日（日）望月達夫（昭13）、佐薙恭（昭31）、山本健一郎（昭32）の三先輩と一緒に、私（昭和33）も北八ッの西天狗の頂上を初めて踏んだ。

この計画は、山本さんの発案により一年前からあったのだが、望月さんの御都合にあわせ、今回ようやく実現した次第。話の出発点は、山本さんが蓼科の東急リゾートに立派な山荘を確保されたこと。そして、望月さんとも、あろう方が西天狗に未踏であったこと。そこで山荘をベースに、この山行は始まる。

六月一日（金）の夜、山荘に到着した頃から霧雨で、明日に向って下り坂。明後日は大丈夫との見通しのもとに佐薙さん提供のオツマミでゆっくりと飲み、夜更けまでおしゃべりが続いた。

六月二日（土）は予想どおり雨。山本さんの手料理の朝食のあと、文字どおり四方山話のうちに、望月さんからは貴重な体験を語っていただく。昼前から雨は止み、仙丈岳が鋸岳稜線上に姿を見せる。甲斐駒ヶ岳と北岳は雲の中だが、左手に鳳凰三山を眺める。山荘に常備の望遠鏡をベランダでのぞき、ワイワイ、ガヤガヤ。予定のない長い午後、高尚なクラシックの音楽をバックに、チビリチビリと飲み始め、望月さんのお話に耳を傾ける。山の話、音楽の話、ロシア語の話等々。沈澱できて本当によかった。

六月三日（日）五時起床、快晴、昨日見えなかった甲斐駒と北岳がくっきりと。右へ移って中央アルプスの山々。その右に御岳。ちょっと離れて乗鞍岳。いずれも残雪をいただく。これだけの眺望をもつ山荘を、山本さんはよくも手に入れたものだ。

さて、タクシーで唐沢鉱泉に到着、鉱泉宿はロッヂ風の新しい建物で、鉱泉のイメージとはちがう。六時四十五分出発、西尾根に取り付き、西天狗へ真直ぐに登る。標高差九百米余、三時間半の行程である。七十六才の大先輩と行動を共にできるのは光栄である。大先輩はマイペースで着々と歩を運ばれる。尾根上の第一展望台では、北アルプスの笠ヶ岳、穂高の山々、槍ヶ岳まで視界が広がる。この尾根道はよく整備されていて歩き易い。気温も湿度も適当で、汗らしい汗もかかずに、予定どおりの時間で西天狗の頂上に立つ。握手。東天狗には人が多いが、三角点（二六四五米）は西天狗にあるのだ。眺望は三六〇度山々々。秩父の遠方には日光らしきところまで見える。このまま引き返すのは惜しいので、東天狗から黒百合平への稜線を楽しみ、渋の湯への道を下ることとした。四時半に唐沢鉱泉へタクシーが迎えに来ることになっている。鉱泉での入浴時間を考えてもゆっくりできる。渋の湯と唐沢鉱泉の分岐点からはとても歩き易い道になった。三時に鉱泉へ帰着。風呂よし、ビールよし、そばがうまい。鉱泉の行き届いたサービスもうれしい。

望月さんは、お疲れの様子もなく、余裕しゃくしゃく。二十年後、果たしてこんなに元気に登れるだろうか。大先輩に見ならって精進したいものである。（一九九〇・六・五記）

香港針葉樹会を訪問

名和　泰三

身体障害者二級である自分が、外国で昔山で一緒だった中島さんや長沢君と会う事が出来たのは、旅行手続をしてくれた蛭川君や兄に感謝する。香港では長沢道彦君と引地真君等にもお世話になった。

香港というと私は映画「慕情」の場面しか思い起せなかったが、今回6／22～6／25の小旅行をさせてもらって香港という特異な都市を見聞出来て楽しかった。

香港には中村保さん、中島寛さん、長沢道彦君、神野隆君、引地真君等と長沢道彦君のお世話で会食した。二十三日の夕食であった。

中村保さんが一九九〇年四月に中国雲南にトレッキングした時の山の写真のアルバムを持参しておられたのでそれを見た。

私には雪山の写真としか思われなかったが「フィルターを使えば……」と写真家の兄は言った。

シェラトンホテルのロビーで「三号車の方…」と声高に日本語で呼ぶ様子は、日本の旅館にいるのかと錯覚した。

二十四日引地真君の案内で訪ねた香港地区と中華人民共和国の境界地にある落馬洲の展望台からの眺めは、日本の景色とは違う雄大なものであった。

さて香港は一般的に平地に大きなビル、アパートビルの林立だが、しかし山地も多くそんなに険しいとは思われない山には緑の木で包まれている。おもしろい土地だ。

旅行者　蛭川隆夫　名和泰三　名和一憲

一橋山岳部のその後

代表幹事　西牟田　伸一

一昨年夏の事故以来、針葉樹会の様々な会合で真剣な討議が続けられて来ました。

「即刻廃部すべし」との石部長の主張に対し、何とか時間を稼いで結論を出さぬまま、現在に至っております。今年度の総会でも話題となり、その時は夏までを猶予期間として経過を見守ると言うことになりました。その間新入部員の獲得、少人数での部活動や会としての援助が何処まで可能かを試みて来ました。その結果は以下の通りです。

1　新入部員の獲得

総会の時にも顔を見せてくれた又賀、田形の2名が加わり、4年の山内、2年の天羽、古田を合わせ5名で夏合宿、及びそれに先立つ訓練合宿を行ないました。但し山内が卒業すれば残った4人は何れも2年生である為、石部長が危惧されている「部として伝統を継続するための量低限の陣容」が保てない状況である事に変わりはありません。しかも、秋になって、そのうちの一人又賀君が「公認会計士を目指すため、暫く休部したい」と言い出しました。勿論その申し出を拒絶する事は出来ません。

なお、山内は今春卒業後、一橋の経済学修士課程に進学する事になりました。

2　少人数での部活動実績

本年度の上半期の部活動については先頃学生から配布された活動報告書にある通りです。正直なところ僅か山内一人の上級生でこれまで天羽、古田が育った事に感心しました。夏合宿の最後に細野君の追悼山行で彼らに会った時の率直な感想です。

夏合宿は北アルプスのダイアモンドコースを沢登りをからめて剣まで。天候に恵まれ予定より一日早く目的地に着きました。

このように、順調に思われた部活動でありますが、先日ちょっとした騒動がありました。それは春山の偵察に出掛けた天羽、古田が私に電話をよこして「白馬山頂で会う予定であった山内に会えないまま、山から下りたが山内から何の連絡もない。」との事。すわ一大事と部室に集まって鮎沢を交えて鳩首協議、とにかく今夜の夜行で行ってみよう、と言う事になり、食料の買い出しに出掛けたところで無事が判明しました。無事は良かったのですが、この事件には考えさせられるものがあります。それはこのようなアクロバチックな山行計画（遅れて山に入る上級生と縦走して来た下級生2人が山の上で会う）を組まざるを得ない点に少人数での活動の問題点が露呈されていることです。

また、石部長が指摘される「少人数の焦りによる事故の発生」が起こるところでした。

3　当会の学生に対する援助

私が前回の会報で提案した、学生との交流を深める会合（奇数月の第一土曜、国立）は残念ながら大した成果は上がりませんでした。7月は石井会長、私のほかは山本健さんのみ、9月は学生夏休みのため中止、先日の月見の宴は石井会長、私のほかは甘利、高橋信成、名和、宮下、川名さんのみでした。また細野君の追悼山行には彼らのほかにご遺族（兄、妹）石部長、私、斉藤、井上（NHK北海道）、それに退部した坪井が参加しました。

学生の側にも問題がない訳ではありません。

今回の騒ぎとなった山行計画を学生担当の私が知ったのは下級生が出発して数日後の結婚式の席上でした。学生の側からOBに接触を求めないのも無理ない事かも知れません。彼らは単に「山に登りたいから一橋山岳部に入った」のであり、そこで気の合う仲間が出来たから辞めないで残っているのです。本心は大学4年間を楽しく山登りに費やす事であろうと思います。うるさく山の登り方をうんぬんしたり、組織の継続をもとめたり、貴重な時間を割いて都心まで呼び出されたりは彼らの希望しない事であろうと思います。

また、援助を求めようとしても、何を会に期待すれば良いでしょうか。残念ながら我々は期待されるべき何も持ってはいないと言わざるを得ません。

このようにトライアル期間が過ぎそろそろ結論を出すべき時期と判断します。学生の側でも何時までも不安定な状態をのぞんではおりません。彼らは新しい山岳部の形として体育会から外れた形を希望しております。そうする事によってなんら今までの活動と変わらぬ活動が可能と考えています。例えば体育会でなくなっても国立の部室は占有可能との学務課の内諾を得ているとの事です。体育会から得ていた若干の装備の現物支給も今はそれほど困っていないから返上しても良いと言います。何より彼らが望むのは自由な山登りだと思います。

今後も針葉樹会としては、学生がそこにいる限り、従前までの援助を続けて行く事、又あってはならない事ではあるがもしもの事が山で起これば、出来る限りの援助を差し延べるとの確認が得られるならば会と学生との関係に大きな差は生じないと思われます。

これまでと大きく違うのは、もしもの時に大学当局の責任問題は回避されやすい、と言う事です。この責任問題が直接会に係わって来る事を心配する必要はないと思えます。石部長には学内にいるOBの貴重な一人として今後ともお世話になると考えています。

これで、一橋山岳部が終わる訳ではない。同好会としてでも命永らえれば将来会員が増えた時には又体育会に復帰すれば良いのです。

最後に会員諸氏にお読み戴きたい書籍を石井会長が推薦されておられます。朝日文庫の新刊に「山で死なないために」の題で朝日の記者である武田文男氏が現代の大学山岳部の問題点について書いておられるそうです。わが一橋山岳部の問題が決して特異な問題ではない事が良く分かるそうです。御参考まで。

最後に、山岳部の現役部員としての現在の考え方について、4年生である山内君の文章を紹介して会員の皆様の理解を深めて戴きたい。

◇　◇　◇

1、夏の剣にて2年前亡くなった細野伸二君の追悼山行を無事終え、はやくも本格的な冬がすぐそこまで迫っている季節になりました。12月14日から冬合宿（燕岳より蝶ケ岳への縦走）、2月下旬プレ春そして3月中旬の春合宿（親不知から白馬・栂池へ）と、充実した山行が行えるよう部員一同心を引き締め活動をしているこの頃です。

2、とはいえ近年の少人数化により体育会としての体裁を名目上整えることが次第に困難となってきた事は、皆様御存じの通りです。そして、今年の春、石部長との話し合いの結果、8月までに新人が十分入部しない限り体育会を脱退し、自主的活動組織に変更する、との結論に至りました。7月になって2人の有望な新人が入部しましたが、2人とも2年生であることと、すでに1人は休部したことにより、来年3月までにはサークル化を実行したいと思います。

3、しかしこの事により、学生の基本的登山方針は、何ら変わりはありません。参考までに今年5月27日付で石井会長及び各部員両親にあてた文章を以下要約引用します。

『当一橋大学山岳部は原則的に学生の自主的活動の場であり、山行計画におきましても現在に至るまで独自に検討を加えて来た次第です。従って、この主体的活動に関する一切の責任は一橋大学とは別個のものと我々は考えております。……

これからの登山方針として以下……

(1) 合宿ではあくまでも基本技術の習得を主題にし、年間を通じオールラウンドな基礎的山行を行う。なお、上級生の自己実現は合宿とは別に個人山行にて行う。

(2) 計画段階において、資料・経験者より正確な情報を集め、ケースタディを通じ徹底的に討論する。この際必ず学生担当OBへ報告する。

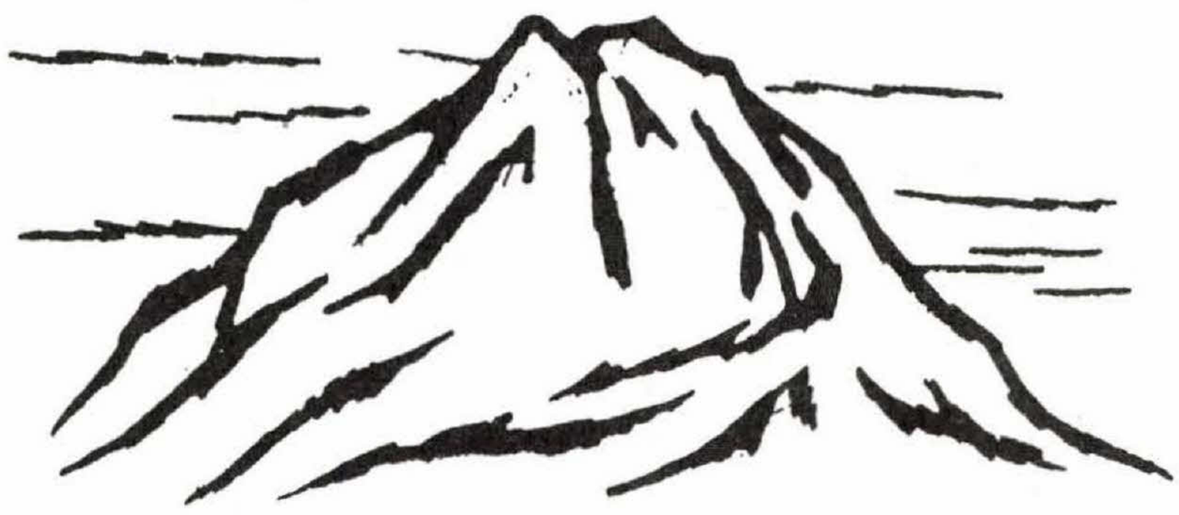
(3) 山行において基本的に1人1人の危険意識を最大限重視する。しかし、同時にリーダーは安全登山という観点から最終決定を下す。

(4) 山行後、必ず反省会を開き、問題点、これからの課題を明確にし、全員で討議する。記録文は必ず残す。

(5) 社会人山岳会と情報交換を行い、合同講習会などに参加する。』

4、来春に体育会を脱退する上で最大の関心事でありました部室の所有は、学務課との話し合いの結果、今後も慣習的使用が認められました。91年内には部分的にであれ改修をしていく心算であります。また、今後入ってくる新人の考え方が安易なものにならないように、サークルとはいえ、活動内容相応の気質を皆が持たねばならないと思います。

5、以上学生の立場から現状報告をさせていただきましたが、何よりも細野伸二君(昨年の)内藤君の事故を皆が忘れぬよう、時代が我々に課している少人数登山という形態に則し、安全な山登りをしなければならないと第一に考えております。



細野伸一君追悼山行

井上　裕之

8月10月は午前中で仕事から解放され、私はスーツを脱ぎ捨て、登山スタイルになって札幌を後にした。飛行機で金沢に舞い降り、その日の夜は富山駅でステーション・ビバークをした。

翌11日早朝、おなじみの急行「能登」で、斎藤OBと坪井君が登場。憎まれ口で再会を喜び、富山から一緒にバスに乗って一路室堂へ。山は小雨模様であった。

室堂に到着すると、夏合宿を終えたばかりの、山内・天羽・古田・田形の4人の現役部員達が私達を迎えに来ていた。懐しの面々は、陽に焼けて髭が伸び、雨に濡れて異臭を放っていた。「オーッ」「元気かー」などと相も変わらぬ調子のやりとりだったが、新人だったメンバーは、以前よりはるかに逞しくみえた。出て来る話は、赤木沢がきれいだったとか、縦走はしんどかったとか、ツュルトで嵐につかまったとか、シュラフが浸水したとか……。

今回の追悼山行には、細野家からはお兄さんと妹さんのお二人が参加して頂くことになっている（お仕事の関係上、残念ながらお母さんには来て頂けなかった）。そのお二人を伴って入山するため、現役部員達が出迎えに来たわけだが、ご兄妹よりも一足早く、石部長がご登場。最近はTVのブラウン管でお目にかかることが多く、ご多忙の合間を縫ってのご参加である。石部長と一緒に山に入ったのは、私の場合入部以来初めてだった。ニッカーにキスリングと古式？ゆかしく決めていらっしゃった。

明日には早々に下山せねばならない石部長の要望もあって、斎藤OBと坪井君、それに私が、サル・イヌ・キジとなって一足先に入山。桃太郎こと石部長は相変わらずの名調子で、重たい雲が山にかかり、小雨降る雪鳥沢でも「コリャ晴れムードだなァー」と上機嫌であった。驚いたのは、小さなキスリングから続々と出て来る昼ごはん、おにぎり、缶詰、漬け物、デザート…。キビダンゴよろしく、三人の家来はパクつくことに相成った。

剣御前を乗っ越し、剣沢の下りでは、氷化した雪渓に少し緊張したが、無事剣沢小屋のテント場に到着。嵐と戦ったHUHACのツェルト二張を発見、荷を置いて一休み。時間を持て余したころになって現役部員に囲まれて、お兄さんの克宏さんと、妹の亜紀子さんがやって来た。今回の山行の立役者の西牟田OBもおられるし、新人の又賀君も一緒であった。ご兄妹は少しお疲れの様子ではあった。

一同がそろうと幕営、そして夕食の準備である。西牟田OBの手ぬかりのないご用意により、嬉しい焼肉パーティー。亡き細野君に黙禱、そして献杯したのち、和やかな夕食の一時を過ごすことになった。テントの外で、寒い中御飯を炊き、料理をしてくれた現役部員に特にお礼を言いたい。

肉にパクつき、酒で温まった後は、明日の予定を検討したあと就寝となる。しかし、夜半になり激しい風雨が数回に渡ってテントを襲い、細野君ご兄妹のシュラフに浸水してしまって大騒ぎとなる。お二方はたまらず小屋に避難。その後も体が冷え切ってなかなか眠れなかったという。全く申し訳ないことをしたものだ。

翌12日は、夜半の風雨とはうって変わって晴れ上がった。石部長は下山、坪井・天羽・古田・田形・又賀の5人は剣岳へ。そして細野家ご兄妹と、西牟田・斎藤両OB、そして山内と私が、事故のあった平蔵谷へ向かう。雪渓上を行くことになるので、ご兄妹にもヘルメットとピッケルを携帯してもらい、軽アイゼンも使ってもらうことにした。「また登り返すのかと思うと…。」と妹さんがつぶやいておられたが、とりあえず

剣沢雪渓をどんどん下る。平蔵谷の出合いに着くと、全員ハーネスを装着、平蔵雪渓を登る。

しばらく登り、事故現場から100m程下あたりで、横一文字のクレバスが、我々の行手を遮る。深いクレバスで、これ以上ご兄妹が登るのは危険と判断し、現場への到達は断念する。シュルンドがどんなところか見てもらおうと、ご兄妹をザイルで確保して、近くのシュルンドを覗いてもらった。

ご兄妹に安全なところで待機してもらい、私はザイルで確保されながら、更に登り、事故のあった中央ルンゼのシュルンドのへりまで行き着く。中を覗くと、底は深く、以前見た光景であったことをはっきり思い出した。「これを置いて来て下さい」とお兄さんから手渡された、亡き細野君の戒名を雪の上に置き、彼の好きだったビールをその横に供えた。合掌。戒名とビールは、風に舞いながら、シュルンドの中に吸い込まれていった。あれはちょうど2年前の今日のことだったのだ。

無事平蔵雪渓を下り、ヒーコラ言いながら剣沢小屋まで戻る。天気がいいから汗の出ること。

テントに戻ると、天羽と古田は既に下山していて、ご兄妹も山内・田形・又賀とご一緒に、この日の内に下山された。「よくこんなしんどいことをやってましたね、お兄ちゃんは」と妹さんがつぶやいていた。

翌日もよく晴れ上がり、全員で剣沢を下った。長次郎谷の出合で、真砂沢方面に向かう西牟田OBと別れ、斎藤OBと坪井君と私は八ツ峰六峰Cフェースの剣稜会ルートを目指した。久々の山登り、岩登りで、現役の頃の体力やバランス感覚は見る影もなかったが、天気もルートも絶好で、最高に快適な岩登りができ、無事八ツ峰上半をトレースできた。そこは細野君が事故に遭う前日に来た、最後のルートでもあった。

楽しくて悲しい山行であったが、ケガ人も無くなによりであった。

黒部川上ノ廊下遡行

近藤　泰

はじめに

山に行く日は、酒を飲まない日と同じく年数回（もっとも山に入ったら酒を飲まない、と言う意味ではないが）などという堕落しきった状況にあって山登りを語る資格は無いかもしれない。しかし、登り残した山、行きそびれた〝ある季節〟の山稜、トレースし損なったルートというものが幾つかある。

なぜ登り残したと気になるのか、或いはなぜ山に飽きないのか、つらつら考えるにその最大の理由は「まだ行ったことのないところ、見たことのない自然に触れたい。」という未知に対する好奇心、探究心が大いに刺激されるからではないかと思われる。その意味で沢登りは、「遡行してみなければ分からない」という部分も多く未知性に富んでおり、かつ登山の持つ別の重要な要素である困難さというものも十分あるため、私の胸の内のリストにも多くの沢の名前が刻まれている。その内大半は、今となっては肉体的、技術的、精神的に、或いはいわゆる家庭の事情（？）等からとてもトレースなど及びもつかないのであるが、それでも何としてでもと諦めきれない沢が幾つかある。

いささかポピュラー過ぎるとの誹りはあるかもしれないが、今回遡行した黒部川上ノ廊下はその中でも、南ア／赤石沢と並び最右翼の沢であった。今夏は、高校時代に「黒部川上ノ廊下＝超熟達パーティー向き」というガイドブックの記録を見てから何と一七年振りに、前神先輩という良きパートナーを得て念願が叶ったわけである。諸般の事情から今回は行き帰りとも夜

行列車とし、下山に時間がかかるため黒部源流は諦め上ノ廊下から赤木沢をぬけ太郎平を経て折立へ、という中三日間の行動計画を立てた。天候に恵まれ首尾良く当初計画通りの山行を果たすことができたが、中年登山者には少々過激な計画であった気もする。熱意余って少々張り切り過ぎた面もあったが、会員の皆様の何かの参考になればと以下遡行の記録をお伝えしたい。

黒部湖から廊下沢出合まで
―平ノ渡しの駆け込み乗船―

（九〇年八月一七日　曇り時々晴れ、のち雨）

昨夜は前神先輩とJR横浜線の最終電車で待ち合わせ、八王子午前一時過ぎの急行に飛び乗り早朝、信濃大町駅に降り立つ。扇沢から黒部ダムまでのトロリーバスの始発が遅いので急ぐ必要も無かったが、タクシーの運転手の「臨時トロリーバスが出る」という言葉にのせられてタクシーで扇沢まで入る。関電の〝大町有料道路〟が無料化されたためか、早朝から沢山のマイカーが扇沢まで入り込んでいる。

殆ど観光客ばかりで満員のトロリーバスを降り、黒部ダムの堰堤を渡ったのは七時二〇分であった。いつもながらこの巨大な建造物には感心させられるが、もしこのダム無かりせば黒部川の渓谷美やさぞかしと思うのも確かである。

秋雨前線の南下で何となくスッキリしない天気であったが今日は奥黒部ヒュッテの先、上ノ廊下の入口に当たる熊ノ沢出合で幕営するつもりなので早々に出発する。歩き始めてすぐにポツポツと雨が降ってくる。記録によれば上ノ廊下遡行パーティーのほとんどは早朝黒四ダムを出発し、正午の平ノ渡し船を利用している。この間のコース時間は三時間半。できればもう一つ前の渡し船に乗りできるだけ先に進み、上ノ廊下の前半の難場である下の黒ビンガを突破しておきたいところであるが、いかんせん午前十時の渡し船では致し方ない。それでもダム湖沿いの水平道なのでもしかしたらと、時折強くなる雨足に追われるように先を急ぐ。黒部湖の水量は昨冬の寡雪と連日の好天のせいか、随分と水量が少ないように思われる。一度も休憩を取らず飛ばしてきたが、黒部湖に流れ落ちる中ノ谷を回り込むところで十時となりやっぱり無理であったかと歩みを緩めようとしたところ、木陰から突然渡し船の姿が目に入る。後は口々に「待ってください！」、「乗ります！」と大声を上げ桟橋まで駆け下った。乗客は我々二人だけ。針ノ木側の出発時間が十時二十分なので少し遅れて発船するようである。少々息が切れたがこれで二時間を稼げたし、雨も止み、今日中に下の黒ビンガを突破しておけば〝三日で上ノ廊下遡行〟の確度も随分高くなるので気分を良くする。

歩きやすい読売新道を二時間ばかりで奥黒部ヒュッテに着く。小屋の人の話では今シーズンも二〇パーティー位が上ノ廊下に入った由。中には上流から（薬師沢の出合い辺りか）ザックや浮き輪に掴まって流れてくる者もいる、と言う話には一瞬シラケたが。

ヒュッテの裏手から約二十分で上ノ廊下の河原に降り立つ。ジョギングシューズを渓流足袋に履き替え、午後一時三十分いよいよ遡行開始。この辺りは比較的広い河原で青空も見え、さほどの緊張感は無い。朝方雨に降られたがこれは水量には殆ど影響が無かったようで、やはり水量は幾分少なめに思える。しかしすぐにヘツリができなくなり股下までの徒渉が始まる。さすがに水は冷たく勢いも強く、早速杖替わりの木の棒を手にする。また天気が悪くなりそうなのと、徒渉で体が冷えるためともかく先へ進むと、本日の山場下ノ黒ビンガが見えてくる。ここのゴルジュ帯はそれほど狭まってはいないものの、右岸から浅瀬が河の中央まで伸びその先が急に深くなっているようで、濃いエメラルドグリーン色が少々不気味である。流されても下流の浅瀬で何とか止まるであろうと、まず私が杖を頼りに右岸から徒渉にかかる。やはり中央部は相当深く腰から、腹、胸まで水に浸かりついには体が浮いて足から流されそうになる。必死になって杖で体を引き寄せ、足でカエル泳ぎをして

間一髪対岸へたどりつく。続いて前神さん。ザイルを出さなかったので引っ張る訳にもいかず、それならばとシャッターチャンスを狙う。前神さんも期待に応え、全力のクロールを披露。

下ノ黒ビンガでズブ濡れになってしまったのであまり気にもならなかったが、口元ノタル沢を過ぎるあたりからまた雨が降ってきた。この辺りのゴルジュは高巻くとかえってやっかいとの記録もあり、ザイルを出して極力水線を行くがいよいよ本降りになり、水流も白濁してくる。できれば広河原まで行きたかったが、このままでは徒渉も危険になってきたので廊下沢出合い右岸の堆積台地に上がり早々にツェルトを張る。天気が良ければ岩魚釣りをするつもりで竿と餌も持ってきたが、今晩はレトルトのカレーにバーボン。軽量化のため火器もブタンガスにしたので、服は生乾きのまま。雨は一向に治まる気配はないが、明日には晴れることを念じつつ八時に就寝する。

〔参考記録〕

黒四ダム（7：20）　平ノ渡（10：10～10：20）　奥黒部ヒュッチ（12：30～12：40）　入渓（13：30）　下ノ黒ビンガ（14：50）　口元ノタル沢（15：40）　幕営地（16：40）

廊下沢出合いから立石奇岩

―徒渉・ヘツリ・泳ぎ―

（九〇年八月一八日　晴れ）

昨日の豪雨が嘘のように、明け方から霧が晴れるにつれ青空が見え始め、対岸のスゴの頭の斜面が明るく朝日に照らされるようになってきた。ツェルトから外を覗き天候の急回復を察したものの、黒部川の水は随分と水嵩を増し勢い良く濁流となって流れているのでつい出発が遅くなってしまった。今日は上ノ廊下の核心部と言うべき上ノ黒ビンガを通過する日。ズブ濡れのシャツや靴下、渓流足袋を履くのはぞっとしないがいずれ徒渉が始まったら同じこと、急いで用意をして出発する。

以前には黒五と言われた堰き止め湖があった広河原は、今はその名の通り広い河原になっていて、学生時代に行った日高の札内川の河原を思い出した。水は若干濁っているが、天気は完全に回復し、朝日に輝く川面はキラキラと眩しく開放的である。そうこうするうちにだんだん川幅が狭まってき、中ノタル沢を過ぎると小尾根越しに上ノ黒ビンガの岩壁が見えてきた。ここまでは速い水流に足を取られながらも、何とか徒渉を繰り返してきたがこんどは川幅も狭まり昨夜の降雨による増水もあり少々おっかないところである。慎重を期してザイルを使い徒渉を始めたが、あっさり流され頭まで水につかる。もう一度徒渉点を変えて空身で挑戦し今度は何とか渡る。上ノ黒ビンガの徒渉で苦労したのはここだけであとは左岸から流れ落ちる滝を愛でながら歩を進め、昼前に金作谷出合いに着く。金作谷の上部には雪渓が引っ掛かっており、その先遠く薬師岳の頂上辺りには夏雲が広がっている。今日中にできれば薬師沢の出合まで行きたいと思っていたので先を急ぐ。金作谷出合の先のゴルジュ帯は最初は右岸をヘツリ、途中から左岸のしっかりした巻き道をたどる。天候は完全に回復し午後には水も澄んできたので、「行ける」と思ったところはどんどん沢の中を歩く。ゴルジュも高巻くと危険だし面倒とばかり、胸までつかっても、ザイルを使ってでもともかく極力水際を行く。赤牛沢の手前の淵では前神先輩の懸命のクロールで活路を開き、三時過ぎに岩苔小谷の出合を通過する。

もうこの辺りにくると標高も一七〇〇メートル台になり、両側の稜線が身近に感じられる。水量も随分と減り徒渉も容易になり、開放された気分になる。今日中に薬師の出合は一寸無理ではあるが「何とか明日には下山」の目処も立ち、立石奇岩を過ぎた河岸段丘にツェルトを張る。早速昨晩の分も取り返すくらい盛大に焚き火をおこし、前神さんのザックから取りい出したる超大型焼き網に、これまた前神さん持参の

ひもの、肉をのせ酒を飲む。
そういえば去年の秋に南ア・笠ケ岳に前神さん、加藤さんと行った時にも（山には登れなかったが）沼津で求めた旨いひものをこうして焼いて一杯やったっけ、と思い出した。
満天の星、真っ赤に燃える薪の匂い、沢の音、ホロ酔い気分、山懐の中の至福の時。

〔参考記録〕
幕営地（7：45）　上ノ黒ビンガ（8：40）　金作谷出合（11：30～11：45）　赤牛沢（15：00）　岩苔小谷（15：15）　幕営地（16：40）

赤木沢遡行、太郎平から折立へ
―久々の北ア主稜線―
（九〇年八月一九日　晴れ）

今日は下山日。とは言ってもまだ赤木沢遡行が残っている。上ノ廊下本流自体にはもうあまり難しいところは無さそうなので、ピッチは上がるとは思ったが早めに天場を発つ。大きめの石を伝い沢を上がって行くが、直に行き詰まり徒渉が始まる。徒渉もこの辺りに来ると随分楽になる。昨晩は当方の餌に見向きもせず、姿を見せなかった岩魚の影が足元を走る。途中、底の測り知れぬ濃い碧色をした大淵を数カ所へツり、雲ノ平から流れ落ちるE沢、D沢、C沢を越し、最後に左岸から淵に飛び降り（胸までつかったので結構堪えた）A沢の出合にたどりつき一本立てる。久し振りにペンキの道標を見る。高天原からの登山道がこの先で合流している。ここからは平凡な河原となり途中、上ノ廊下を遡行したと思われる二人パーティーを追越し、登山客がくつろぐ薬師沢の吊り橋をくぐる。（このパーティーが沢の中で会った初めての登山者であった）天気はますます良くなり、青空が高い。赤木沢の手前はちょっとした渓谷になっており、巻き道もしっかりついているので、碧色の釜と白い花岡岩を俯瞰しながら先へ進む。そうこうするうちに赤木沢出合の〝天然プール〟に到着する。時間があれば泳ぎたくなるところである。黒部一の美渓と称せられる赤木沢は左岸から意外と狭い間口で流れ込んでいる。ここからは滝登りも出てくるので、今まで世話になった杖を捨てイソイソとF1に向かう。徒渉に次ぐ徒渉の上ノ廊下も悪くはないが、さほど難しくない滝が続く、明るい開けた沢を軽快に進んでいくのもなかなか楽しいものである。振り返れば黒部の源流が祖父岳を回り込んでいくところや、雲ノ平の伸びやかな台地が指呼の距離に見え、この沢の人気が高いことが納得できる。
途中F8　三五メートルの滝のみを高巻いて「ハイ松の根元から水が吹き出す」源流に着いたのは、出合から二時間半後の正午過ぎであった。緑の樹林帯の中を目で追える赤木沢、その上部に重なる薬師岳、立山に連なる峰々を眺めていると、これでようやく（若干変則ではあるが）黒部川を遡行して源流を詰めたという実感がわく。水源から先は藪こぎもなく、お花畑の中を適当に歩き縦走路に出る。上ノ岳のピークを越せば、後は太郎平小屋の赤い屋根を見ながらゆっくり下るのみ。二人とも疲れてはいるが久々の充実感を味わう。往時に比べれば随分登山者が少なくなったと思われる太郎平小屋で大休止後、麓の折立にタクシーを呼んでもらう段取りを付けてから下山にかかる。西日で赤く染まった圧倒的なmassの薬師岳を背に、傾いた日差しを浴びて目を細めながら黙々と山道を下っていくと、未踏でも、既踏でも構わない。山に登れるだけで、それで幸福なのだとあらためてしみじみ思ったのであった。

〔参考記録〕
幕営地（6：15）　A沢出合（7：30～7：45）　薬師沢出合（8：25）　赤木沢出合（9：50）　赤木沢水源（12：20～12：40）　縦走路（13：15）　上ノ岳（13：30～13：40）　太郎平小屋（15：00～15：40）　折立（18：20）

会務報告

平成二年度総会は、六月二七日、如水会館けやきの間にて開催されました。OB三七名および学生七名の出席を得、盛会となりました。

当総会にて、審議・承認された事項は次のとおりです。

一、平成元年度活動報告

(1)懇親山行　瑞壇山（ミズガキ）（5／20）

(2)会合

イ　評議員会（6／14）

ロ　総会（6／21）

ハ　臨時評議員会（1／18）

ニ　新年会（1／25）

ホ　幹事会（6／7）

(3)出版物

イ　会報（第73・74号）

ロ　如水会報　投稿（元年8月号）

ハ　針葉樹会会員名簿（元年度）

二、平成元年度　決算（後表）

三、平成二年度　予算（後表）

四、平成二年度役員および幹事

(1)会長　石井左右平

(2)副会長　石原　脩

(3)評議員

岩崎利一　根本　大

小林茂雄　樋口　洪

石井左右平　田中一雄

笠原広信　石原　脩

甘利仁朗　上原利夫

倉知　敬　加藤正巳

松尾信孝　藤本敏行

浅田　充　松田重明

岡部　寛

(4)幹事

代表幹事　西牟田伸一

総務　中西　茂

石丸義男

会計　稲毛尚之

会報　近藤　泰

岡部晃和

山行　前神直樹

米田篤裕

学生担当　西牟田伸一

斉藤　誠

五ケ山淳

保険　稲毛尚之

(5)監事

山本健一郎　佐藤久尚

(6)新入会員紹介

小野　一　井上裕之

五、平成二年度　活動予定

(1)懇親山行

イ　秋の山行（10／20・21）

ロ　冬の山行（3／16・17）

(2)会　合

イ　評議員会

ロ　総会

ハ　忘年会もしくは新年会

ニ　幹事会

(3)出版物

イ　会報

ロ　如水会報投稿

(4)OB・学生交歓会

奇数月第一土曜日午後二時より国立にて

総会の後、一橋山岳部の現状報告、および今後のあり方について、石山岳部長はじめ諸先輩方の貴重な御意見・御訓辞がありました事も、ご報告申し上げます。

（総務幹事　中西　茂）

〈会員住所変更および訂正〉

S27年卒　小泉　三好

（勤務先）〒103　中央区日本橋兜町一〇―三　安藤証券㈱　顧問

☎〇三―三六六九―二〇一七

S41年卒　佐藤　久尚
（勤務先）日本輸出入銀行営業第一部
☎　〇三－三二八七－九五九一

S47年卒　西牟田伸一
（勤務先）〒100　千代田区丸の内二－五－二
三菱化成ポリテック㈱総務部
☎　〇三－三二八三－四五九七

S51年卒　加藤　博行
（勤務先）㈱日本リース財務部
マーケットチーム
☎　〇三－三二一四－〇一六〇
（自　宅）〒270-01　千葉県流山市大字加七五〇番地
サウスコート弐番館一〇八
☎　〇四七一－五〇－三〇七〇

S53年卒　佐藤　活朗
（勤務先）☎　〇三－五六〇六－三六〇六

S55年卒　引地　真
（勤務先）渋谷区神宮前五－五二－二
JBPオーバル3F
日本エンタープライズ・
デベロップメント㈱資本政策室
☎　〇三－三七九七－九五七五
（自　宅）横浜市緑区藤が丘一－三九－九
藤が丘ヒルズ四〇一号
☎　〇四五－九七二－二四〇九

S56年卒　小林　修
（留守宅）〒182　調布市多摩川七－一七－二六
月村繁男気付
☎　〇四二四－八七－七〇六三
（勤務先）Mitsubishi Corp do Brasil SA
Filial do RIO DE JANEIRO
☎　五五（二一）五五二一－三三二二

S57年卒　宮下　克彦
（自　宅）〒272　市川市稲荷木一－二四－一
榊原第二マンション五〇三
☎　〇四七三－七八－五八九九

針葉樹会平成元年度決算報告

1．一般会計（1．6．1～2．5．31）

収支計算書　（円）

支出		予算	収入		予算
会報発刊費	434,892	350,000	納入会費	797,000	1,000,000
総務費・雑費	77,885	80,000	雑収入	40,184	
山岳部活動補助	150,000	250,000	前年度より繰越	175,226	175,226
学生保険料（基金へ振替）	32,000	48,000	利息	1,745	
通信連絡費	149,871	220,000	その他	52,748	
名簿発刊費	172,762	150,000			
次年度へ繰越	49,493	77,226			
合計	1,066,903	1,175,226	合計	1,066,903	1,175,226

支　出　会報発刊費　針葉樹72号 106,178（昨年度決算より超過）、73号 168,714
74号 160,000（予定）。

収　入　納入会費のうち 549,000が今年度分会費。
雑収入は昨年度集会会費余剰金。
その他は昨年度未払い金振り替え戻し。

2．遭難対策基金（1．6．1～2．5．31）　（円）

支出		収入	
学生保険料	32,000	前年度分基金有高	4,095,576
内藤君遭難対策費	106,773	学生保険料（一般会計より）	32,000
当年度基金有高	4,249,153	利息	260,350
合計	4,387,926	合計	4,387,926

運用（ワリサイ）基金有高は満期額面による。

針葉樹会平成2年度予算案

1．一般会計（2．6．1～3．5．31）

収支計算書　（円）

支出		収入	
会報発刊費	350,000	納入会費	850,000
総務費・雑費	80,000	前年度より繰越	49,493
山岳部活動補助	200,000		
学生保険料（基金へ振替）	40,000		
通信連絡費	150,000		
次年度へ繰越	79,493		
合計	899,493	合計	899,493

2．遭難対策基金（2．6．1～3．5．31）　（円）

支出		収入	
学生保険料	40,000	前年度基金有高	4,249,153
当年度基金有高	4,529,153	利息収入	280,000
		学生保険料（一般会計より）	40,000
合計	4,569,153	合計	4,569,153

運用（ワリサイ）基金有高は満期額面による。

編集後記

当初年内発行を約して会務担当となりましたが、遅れに遅れてしまったことを、この場をお借りしてお詫び申し上げると共に、深く反省致しております。

☆　☆　☆　☆

思っていた以上に大変な仕事ではありましたが、諸先輩方がいかに精力的に山に登り続けているのかを実感出来たことは、大変有意義なことでした。

引き続き次号に向けて頑張りたいと思いますので、多数のご寄稿をお願い申し上げます。

（S58年卒　岡部晃和）